学苑・近代文化研究所紀要　第九五九号（六七）～（七七）（二〇二〇・九）

「世田谷」と下肥

松田　忍

Setagaya and Night-soil

Shinobu Matsuda

Abstract

This paper explores the history of night-soil utilization in Setagaya for agricultural production and changes in the ways night-soil was used in the course of urbanization. In Setagaya, located in the west of Tokyo (Edo), vegetables were cultivated with night-soil fermented from human excrement. Farmers sold vegetables and bought fertilizer in the town. This commerce between farmers and urban residents created and maintained an equilibrium among city dwellers, night-soil peddlers and farmers. The farmers in Setagaya also benefited greatly from ample cheap night-soil from the many military facilities located in this area.

In the 1910s, as the population of Tokyo increased, the farmers in the western suburbs could buy night-soil from areas closer at hand than urban Tokyo. This caused difficulties in the disposal of human waste in the west part of the City of Tokyo (Yamanote) and the beginning of the municipalization of the disposal of human waste. This lead gradually away from a system in which farmers paid for human waste, to one in which residents paid the city to dispose of their waste.

After the Great Kanto Earthquake in 1923, housing increased in Setagaya, but lots of farmland still existed and collecting human waste was commonly seen until 1936 when most of the disposal work was taken over by the government.

Key words: Setagaya (世田谷), night-soil (下肥), human excrement (人糞尿), material circulation (物質循環), disposal of human waste (屎尿処理), night-soil peddlers (屎尿処理業者), military facilities (軍事施設), farmers (農民)

はじめに

歴史的にみれば、東京（江戸）と郊外は、東京（江戸）が下肥の材料となる屎尿を供給し、郊外が蔬菜を供給する物質循環で結合されていた。[1] 二三区内の下水道普及率がほぼ一〇〇％に達した現在からは想像がつきにくいことであるが、江戸時代から明治を経て大正時代の半ばに至るまでは、下水道がなくとも屎尿処理は大きな都市問題となっていなかった。すなわち、東京（江戸）と近郊農村とで屎尿の需給バランスがとれており、「各戸と近郊農民或は汲取営業人との間に直接汲取契約が締結され、汲取人の方からその代償として現金を支払ひ、又は農産物を提供し何等の支障も起らなかつた」[2] のである。

その状況のもと、いささか珍妙な事件も起きている。近世の「世田谷」においては江戸の町家や武家屋敷と契約して、下掃除をおこない屎尿を受け取る契約を結んでいた。特に彦根藩世田谷領の村々は、彦根藩の江戸藩邸の下掃除を引き受けてきたが、天保年間に江戸藩邸の一部家中たちが屎尿汲取拒否をおこなう事件が生じたのである。自分たちの屎尿を下肥として農業利用したい家中たちと、対価を支払い下肥入手の権利を得ている農

民たちが貴重な肥料をめぐって対立したことに事件の原因があった。[3] 屎尿が経済的価値を有していたことを示す好事例といえよう。

明治期に入っても事情は変わらない。川路利良大警視がだした屎尿汲取に関する布達が「旧太子堂名主森家文書」に残されている。そのなかでは「糞尿汲取及ヒ運搬之節、夜陰者惣赤地ノ提灯可相用」こと（一八七七年）、[4] 午前八時から午後五時までを「糞尿汲取方及運搬禁止時間」とすること（一八七七年）、[5]「臭気不洩」ための「糞尿桶」の構造に関する規制（一八七八年）[6] などが挙げられているが、いずれも都市の美観を守るための指示であり、屎尿処理方法を本質的に変更するものではなかった。

表一　全市１日の排泄屎尿の処分方法

処分別 １日 13,020 石	汲取 11,750 石	近郊農家の汲取に依るもの	1,980 石
		民間汲取に依るもの	8,540 石
		市（区）直営に依るもの	1,220 石
		自己処分に依るもの	10 石
	自然処分 1,270 石	浄化装置に依るもの	770 石
		下水道直結便所に依るもの	500 石

（備考）東京市保健局『公衆衛生ブックレット　第１輯　東京市屎尿処分調査概要』（大日本私立衛生会出版部，1930 年）43 頁より作成。なお「自然処分による石数は人口其の他の事情を斟酌して推定せるもの」とされている。

屎尿の需給バランスがくずれ、東京市の屎尿処理が停滞し始めたのは一九一七年から一九一八年にかけての頃であった。[7] それまで汲取業者と農民の手のみに委ねられていた屎尿処理だったが、一九二一年に、東京市が牛込区、小石川区、本郷区で市直営の汲取作業を開始した。[8] またこの時期から、汲取の有料化（つまり各戸が費用を負担して屎尿処分を依頼する）が徐々に広まっていった。

表一には、一九三〇年における屎尿処分方法の比率を示した。この時点においても下水道直結便所の設置はごく少数であった。東京市の九八％が従来の汲取便所であり、[9] 東京市から一日に排泄される一三、〇二〇石の屎尿の大部分が汲取によって処理された。主として民間業者によって汲み取られる一方で、「市（区）直営に依る」処分は約九％にあたる一、二二〇石にとどまり、農家による汲取が依然として一、九八〇石も存在し、これは全排泄量の約一五％に相当している。

汲取の市営化には地域性が存在していた。当時の東京一五区のなかで、一九三〇年時点では麹町区、芝区、麻布区、赤坂区、四谷区、牛込区、小石川区、本郷区、下谷区、浅草区の一〇区の汲取に東京市は応じていた。これら山の手を中心とする地域では交通の便が悪く、各戸が汲取業者や農家と契約を結んで屎尿処分を依頼することが困難であったからである。[10]

その後、汲取の全面的な市営化が実現するのは旧市域（一五区）でも一九三四年、世田谷区も含まれる新市域では一九三六年まで下る。さらにまだこの時期においても一部農耕地帯では農民による汲取がおこなわれていた。[11]

近代日本の都市における屎尿処理の問題は、渡辺善次郎『近代日本都市近郊農業史』（論創社、一九九一年）を先駆的研究としつつ、近年急速に研究が進展している分野である。

星野高徳氏は、蔬菜栽培と下肥供給との関連を重視しつつ、東京西郊と北郊・東郊とにおける屎尿流通構造の違いに着目した研究を土台として、東京市周辺の屎尿流通網の編成や屎尿処理の市営化をめぐる論点を整理し、屎尿処理をめぐる研究水準を大きく進展させた。[12]

また名古屋市を研究対象とした湯澤規子氏は、施肥技術の発展や農家の肥料購入状況をも踏まえつつ、一九二〇年代には屎尿の市場価値は失われるとしても、農業経営の視点から、一九三〇年代には下肥の重要性が一層高まることを指摘している。[13]

これらの先行研究を参照しつつ、本稿では下肥と蔬菜栽培に焦点をあて、近代「世田谷」の地域特性について素描を試みる。

なお世田谷区は一九三二年に旧荏原郡世田ヶ谷町、松沢村、駒沢町、玉川村が合併して誕生した。さらに一九三六年に北多摩郡砧村と千歳村が編入され、世田谷区は現在の区域となる。つまり東京市の市域拡張以前には世田谷区は存在しないのだが、本稿では便宜上、現在の世田谷区域に相当する地域を指す場合は、カギカッコを付し「世田谷」として表記する。

また旧荏原郡世田ヶ谷村（一九二三年から世田ヶ谷町）は史料中では世田谷村（世田谷町）の表記で記載されることも多い。史料についてはそのまま引用し、本稿執筆者の表記としては世田ヶ谷村（世田ヶ谷町）に統一した。

一　「世田谷」の農業と下肥

「世田谷」は武蔵野台地の南端に位置し水利は良くない。そのため江戸時代より畑地が多く、コメよりもムギ・キビなどの雑穀や蔬菜栽培のほうが盛んであった。[14] 近代にはいっても畑地が多い状況は変わらない（表二）。稲も栽培されてはいるが、多摩川に近く水利が比較的良い玉川村では水稲耕作が盛んであった一方、[15] それ以外の地域では畑地での陸稲栽培の方が広く展開した（表三）。

蔬菜栽培について、一九一〇年代後半頃に、各村の主要栽培品目として示されたデータを村別にまとめたが（表四）、その種類は多岐に亘っている。また促成栽培の取り組みも早くからみられ、旧荏原郡域の四ヶ村全てで促成栽培がおこなわれ、茄子、胡瓜、菜豆、冬瓜、蕃茄（トマト）などが生産されていた。[16] 小田内通敏『帝都と近郊』によると、駒沢村では、一九一五年末において実に三二品目もの蔬菜が栽培されており、いずれも東京市に出荷されていた。[17]

農村工業も展開した。等々力や奥沢の地域は沢庵に用いる大根の産地として知られており、当初は生の大根や干大根を販売していたが、農家副業として漬物に加工して販売したほうが有利であったため、一九一三年には玉川村漬物

表二　「世田谷」（旧荏原郡域）における耕地面積内訳（1910年）　単位：反

	田		畑	
	自作地	小作地	自作地	小作地
世田ヶ谷村	360	659	2,555	3,689
松沢村	231	216	1,633	958
駒沢村	295	302	2,938	1,934
玉川村	331	1,155	5,359	1,750

備考：荏原郡農会編『荏原郡農会史』（荏原郡農会，1913年）110-111頁より松田作成。反未満は四捨五入した。

表三　「世田谷」（旧荏原郡域）における稲作付面積内訳（1918年）　単位：反

	水稲作付面積	陸稲作付面積	計
世田ヶ谷村	1,047	1,068	2,115
松沢村	384	624	1,371
駒沢村	561	1,034	1,595
玉川村	1,475	1,126	2,601

備考：東京府荏原郡役所改築祝賀協賛会編『東京府荏原郡勢一覧』（東京府荏原郡役所改築祝賀協賛会，1920年）69頁より松田作成。

表四　「世田谷」（旧荏原郡域）における果樹・蔬菜栽培主要品目

	果　　樹	蔬菜など
世田ヶ谷村	栗	甘藷（サツマイモ），甘藍（キャベツ），西瓜
松沢村		甘藷，馬鈴薯，甘藍
駒沢村	栗	南瓜，筍，胡瓜，甜瓜（メロン），越瓜（シロウリ）
玉川村	梅，栗，枇杷	蘿蔔（ダイコン），甘藷，筍，甜瓜

備考：「果樹」については東京府荏原郡役所改築祝賀協賛会編『東京府荏原郡勢一覧』（東京府荏原郡役所改築祝賀協賛会，1920年）73-74頁，「蔬菜など」については東京府農会編『東京府の農業　附・林産及水産業』（東京府農会，1917年）58-59頁を参考にして松田作成。

組合が結成され、その組合員数は一〇〇名を超えた。一九一六年度の漬け込み品種は梅五、〇〇〇樽、沢庵大根二、〇〇〇樽（各々四斗入）に達する壮大なものであった。[18]

「世田谷」東部から都市化が進展した昭和初期になっても、西部の旧玉川村村域でいまだ農村風景が広がっており、多摩川べりに花卉栽培のための温室が建ち並び、「温室村」の呼称も生まれ、さらに「玉川梨」のブランドが成立したことが知られている。[19] また帝国農会が一九三五年に挙げた調査統計によると、玉川村農事共同組合は、馬鈴薯（一九六トン）、胡瓜（六五トン）、漬菜（一五三トン）、茄子（一三七トン）、トマト（四五トン）の生産販売数を誇っていた。[20]

「世田谷」の蔬菜生産を肥料面で支えたのが下肥であった。明治・大正期には「下肥は窒素に富むが故に、特に桑・茶其の他の蔬菜の如き需葉作物、大麻、藺などの如き繊維植物に有効なり」[21] と広く認識されており、東京の下肥を潤沢に入手できる近郊地域に、東京に出荷する蔬菜栽培が栄える原因ともなった。「世田谷」に関しても同様であり、『世田谷往古来今』は明治二〇年代以降の農産物販売と下肥汲取の様子を次のように記す。

> 農家は、収穫した作物を都心の青物市場に出荷するために真夜中に荷車で出発して、明け方の取引で現金を得たのち、帰りには市内で下肥を汲取ってから戻った。汲取りは肥料の購入とみなされ、代金を支払うのは農家の側であった。[22]

「世田谷」の農民はいずれの地域まで下肥汲取に出向いていたのだろうか。一八八七年七月一五日に作成された「下掃除汲取場各名記簿」（旧松原村相原家文書）[23] によると、その汲取先として麹町区、神田区、芝区、赤坂区、四谷区、牛込区、内藤新宿、南豊嶋（ママ）郡千駄ヶ谷村が挙げられている。また「旧奥沢村年寄　原家文書」に残る一八九三年から一九〇四年までの下掃除に関わる領収書からは芝区が汲取対象となっていたことが分かる。[24] すなわち東京西郊に位置する「世田谷」は当時の市域であった東京一五区の西部、いわゆる山の手地域を汲取対象としていた。

それに対して、東京一五区の東部、いわゆる下町地域の下肥は東京東郊・北郊の町村が主に利用していた。下掃除に伴う下肥取得の機会が、地理的関係によって東西に分かれていたと単純にいえそうだが、歴史的にみると、東京西郊と東郊・北郊とで下肥流通をめぐる状況は大きく異なっている。

屎尿を供給する町方と、下掃除を引き受けつつ屎尿を購入し下肥とする村方との間の屎尿価格をめぐる対立は江戸時代から存在していた。一七八九年から数年間にかけて江戸周辺の一〇〇〇ヶ村が結集し、下肥価格の引き下げを求める運動に発展した。[25] すなわちこの時期は西郊、東郊・北郊を問わず農民たちは団結し、都市民に対して下掃除価格の引き下げを供給したのだといえる。

一方で天保・弘化期（一八三一年―一八四八年）になると、江戸東郊と西郊ではその対立の様相が異なってきた。すなわち江戸川や荒川などの水運を利用した下肥の大量輸送が可能であった東郊・北郊では、下肥の商品化が進んできたことを受けて、下肥業者の統制・掌握や下肥の河岸価格の安定を求める村方の運動が盛りあがった一方、下肥の商品化が比較的未発達であった西郊農村では、東郊・北郊の農村と連繋しての運動には発展しなかったことが指摘されている。[26]

下町から農村に水運で屎尿を供給する東郊・北郊と、山の手から農村に陸運で屎尿を供給する西郊との対比的構造は近代に持ち越され、下肥価格の地域差となってあらわれた。「近距離輸送より長距離輸送、水路輸送よ

り陸路輸送」の方が輸送費用はかさみ、屎尿価格が割高となる。[27] その結果として、一九〇七年における東京市の屎尿調査によると、東郊・北郊に位置する南葛飾郡、北豊島郡、南足立郡では屎尿一石あたり三〇銭代で入手可能だったのに対して、西郊では荏原郡（二六・〇銭）、豊多摩郡（三四・四銭）、北多摩郡（四九・〇銭）、南多摩郡（七一・四銭）と東京市内から遠くなるにつれ、屎尿価格が高騰したのである。[28] 一方で「世田谷」の中心部が位置する荏原郡への屎尿供給は陸路輸送であったが、東京市内への近さから屎尿価格の安さが際立っていたことが分かる。

小田切通敏『帝都と近郊』には、西郊に位置する「世田谷」の駒沢村は「日本橋より直径三里内外の距離に位し、蔬菜栽培地帯の中枢たり。其中央を貫通する厚木街道は、隣接町村中最も発展せる渋谷町を過ぎて赤坂区青山に通じ、畑作物に要する肥料の如き、今や一里弱の渋谷町の供給により[29]て」豊かに入手できると記されている。現在首都圏交通の大動脈となっている厚木街道（現、国道二四六号線）はかつて野菜と下肥が行き交う道でもあった。

また「世田谷」の下肥事情として重要なのは軍事施設の存在である。明治維新以降、東京の軍事施設は皇居周辺部におかれていたが、政権が安定する明治一〇年代以降に、東京中心部の軍事施設が東京西郊に次々と移転される。特に日清戦争を経て、明治三〇年代になると、新たに増設された騎兵や砲兵の兵営、駒沢練兵場などが「世田谷」に造営される。[30] 先に挙げた駒沢村についても「隣村世ヶ田谷村に亙り設置せられたる諸兵営の肥料も、亦其蔬菜栽培に多大の便益を与ふ」[31] と記されている。

「世田谷」の蔬菜生産はこうした好条件にも支えられていた。

二　「世田谷」への人口流入と宅地化の進展

一九二〇年代の東京市では都市化が大きく進展し、「世田谷」の人口も急増する。国勢調査の結果によると、「世田谷」の旧荏原郡域の人口は三一、九八五人（一九二〇年）、七八、二七〇人（一九二五年）、一三三、二四九人（一九三〇年）、一九〇、四八六人（一九三五年）と急増していた。[32]

一九二三年の関東大震災によって、下町地域が大きな被害を受けたことによって、「世田谷」など東京西郊の宅地開発が進み、東京の人口重心が西へと移動したことは広く知られている。

現在も千歳烏山駅の北側に残る烏山寺町は関東大震災後の世田谷の象徴といえるだろう。烏山寺町は関東大震災以後、浅草、築地、下谷、麻布、三田などの寺院が続々と移転してきて形成された。この移転は関東大震災以前から続く東京の都市計画の流れのなかで、関東大震災での被災が寺町形成の主要因になり実現した。[33]

以上の変化を受けて、一九三五年の国勢調査附帯調査の報告書によると、世田谷区（千歳村、砧村を除く）の夜間人口が一三三、二四九人であったのに対し、昼間人口は一一六、九一一人となっており、[34] 典型的な住宅地としての発展をみていた。

こうした都市化の進展には地域差が存在した。「世田谷」西部においては一九二〇年時点で世田ヶ谷村一三、〇五四人、駒沢村八、六八四人の人口に達し、[35] 一九二三年に世田ヶ谷町、一九二五年と駒沢町と相次いで町制が施行されたのに対し、松沢村、玉川村はいまだ「農耕地的傾向を多分に保持」[36] していたのである。

しかし一方的に宅地化されていく現状を「世田谷」の人びとが黙認してい

たわけではない。農耕地を整理して宅地化に対応させる区画整理事業に挑んだ事例として、一九二六年に創立された玉川全円耕地整理組合がある。

一旦蚕食的に宅地化が進行し始めると、個別地主の利権が入り乱れ、全面的な区画整理は困難になる。「宅地化の気配がしのび寄りつつも、まだ実際には家が建っていないというタイミング」[37]を捉えて、当時の玉川村村長の豊田正治は耕地整理組合を立ち上げた。同組合の整理事業の対象は、当時の玉川村の全村域（現在の地名でいうと、等々力・尾山台・中町・野毛、玉堤・深沢・奥沢・玉川田園調布・上野毛・用賀・瀬田・上用賀・大蔵・玉川台・玉川・東玉川・砧公園など）に及び、戦前の東京で最大規模の土地整理となった。[38]

玉川全円耕地整理組合の研究をおこなった高嶋修一氏によると、玉川村内にも、宅地化の機運が高まり、早く区画整備したい東部で事業への賛成者が多く、農村的性格が強かった西部（瀬田や用賀といった多摩川に近い地域）では反対者が多かったことを指摘している。こうした組合内の利害対立に加え、事業が長引く中で宅地化が進展し、新規の都市計画道路建設や下水計画などで設計変更を余儀なくされ、玉川全円耕地整理事業は一九五四年までかかることとなる。[39]

本節でみた都市化の進展によって、「世田谷」の景観は大きく変化するとともに、農業と下肥との関係は変化していくことになる。

三　下肥の需給バランスの変化と「世田谷」

都市化の進展は下肥の需給バランスを大きく変動させた。その結果、農民が金を出して買う商品だった下肥が、金を出して処分してもらう屎尿へと変化していく。その状況は地域ごとで異なり、変化は一様ではなかった。再び小田内通敏『帝都と近郊』を見る。

我東京市の戸口は、年々増加せる結果、今日に於ては市及其隣接町村を合せて約二百五十万に達したり。今一人一箇年三荷の糞尿を排泄するとすれば、其総量七百五十万荷を計上すべし。かゝる肥料の豊富は、為に其価格の下落を来たし、明治二十八年頃には大人一箇年三十五銭小人一箇年十七銭五厘の下掃除契約が、大正四年には大家一箇年一円小家一箇年五十銭の割に下落したり。殊に之を需要すべき農村に於ては、比較的近き隣接町村が都市化せる結果、之を得るの便益々多くなれり。本地域（東京西郊）に近き山ノ手の諸区に対しては農家は一箇月一人に就き掃除料二銭を払ふも、東京市の中心たる日本橋・京橋区等は掃除人乏しき結果、却つて下掃除料を出すの傾向あり。[40]

同時代を生きた小田内は、隣接町村に都市化が広がり、隣接農村地域は近場で下肥を得られるようになった結果、屎尿汲取の手が都市中心部まで及ばなくなり、下掃除の有料化の傾向がみられる様子を述べている。

下肥をめぐる需給バランスの変化に一番打撃を受けたのは汲取業者であった。星野高徳氏によると、屎尿処理の停滞をめぐる問題が新聞紙上で取りあげられるようになったのは一九一七年頃であり、一九一八年には東京糞尿肥料組合が結成され、汲取有料化に向けての取り組みがなされた。そして有料汲取地域が麹町区と神田区を皮切りに、山の手地域を中心に広がっていたことが述べられている。[41]元来の屎尿流通が「市中心部の宅地と市外の農家の間の流通」であったのが、宅地地域の空間的拡大によって、「市外縁部の宅地と市外の農家の間の流通」へと変化し、屎尿処理が行き詰まった地域から行政による屎尿処理が開始されたのである。[42]

東京西郊に即していうと、宅地が郊外に広がってきたがゆえに、「世田谷」地域などの諸村は東京市中心部まで赴いて屎尿を入手する必要がなく

なり、それゆえに山の手の屎尿処理が停滞し、有料汲取化が進んだことが分かる。

一九二〇年代の「世田谷」でもこうした下肥の需給バランスの変化をうかがわせる史料が残されている。下肥事情にみる世田谷の地域特性として近衛師団などの軍事施設の存在を先に指摘したが、「旧松原村相原家文書」には、大正期に軍との間で交わされた下肥・馬糞・寝藁の払下げに関する契約書が複数残されている。[43]

一九一九年三月三〇日に野砲兵第一三聯隊長と長島作太郎世田ヶ谷村農会長との間で結ばれた「下肥馬糞寝藁払下契約書」では、一九一九年四月一日から一九二〇年三月三〇日までの間、長島作太郎が同聯隊の下掃除を請け負う代わりに、下肥などの払下げを受ける契約になっていた。[44] さらに長島作太郎は世田ヶ谷村太子堂にすむ中山憲次に下掃除を下請けさせていた。[45]

しかし一九二一年四月一日に、近衛師団軍隊・近衛歩兵第二聯隊・野砲兵第一三聯隊の下肥掃除に関して、近衛師団経理部長河内暁と世田ヶ谷村農会長の長島との間に結ばれた「近衛師団軍隊・近衛歩兵第二聯隊・野砲兵第十三聯隊下肥掃除等に関する契約書」では、前者が後者に補償金額を交付するように変化しており、金銭の授受の方向が逆転していることがわかる。[46]

さらに翌一九二二年三月三一日には、近衛師団経理部長河内暁と周辺六ヶ村（荏原郡目黒村、駒沢村、世田ヶ谷村、碑衾村、玉川村、豊多摩郡和田堀内村）の各農会長との間で、「世田谷」近辺に展開する軍隊の下掃除に関する包括契約が結ばれている。さらに、その書類名は「下肥・馬糞等掃除請負契約書」[47]となっており、一九一九年時点の「払下契約」から「掃除請負契約」への変化をあらわしている。

ただし掃除に対する補償金支払いと同時に払下げがおこなわれていた可能性が高い。

「旧松原村相原家文書」には、作成年は不詳であるが「下肥・馬糞其他処分担任区分調書」[48]が残されており、軍から農会に対して補償金を払う一方で、農会から軍へと下肥代金となる払下げ金を支払い、その差引で金銭授受がなされていた形跡が残されている。しかし補償金を受けている駒沢村、碑衾村、玉川村、世田ヶ谷村、目黒村の各農会については補償金額が払下げ金を大きく上回っており、金銭支払の流れは、「農会から軍」から「軍から農会」へと変化したといえるだろう。

また「下肥・馬糞其他処分担任区分調書」には各農会の下掃除分担が記載されている。駒沢村農会、碑襖村農会、玉川村農会が担当したのは、近衛師団司令部（および同乗馬委員）、近衛歩兵第一旅団司令部、近衛歩兵第一聯隊、野砲第一旅団司令部、近衛野砲兵聯隊の人員一一、〇四四人および馬七、四六二頭の下肥・馬糞掃除であり、世田ヶ谷村農会の担当は近衛歩兵第二聯隊、野砲兵第一三聯隊、近衛師団軍楽隊の八、二八〇人、馬五、三一一頭に及んでいる。軍施設の存在が「世田谷」の下肥供給に及ぼした大きな影響を感じさせる。

しかしながら、軍から大量の屎尿供給を受けていても、「世田谷」地域内部の屎尿処理の滞留はまだ確認できない。

一九三二年の市域拡張に関して作成された調査資料にて、「世田谷」の屎尿処理状況をみると、いまだ行政の介入は見られず、民間に全て頼っている状況であった。各町村の屎尿処理状況は「約半量ハ肥料トシテ使用シ、他ハ運搬人ト直接契約シ処分セシメ、町ヨリハ時々監督指揮スルコトアルノミ」（駒沢町）[49]、「本村ハ大半農家ナレバ目下ノ所何等町ノ機関トシテノ設備ナク、各戸夫々糞尿或ハ塵芥ヲ自家用肥料トシテ処理スル状態ニア

リ」（玉川村）[50]、「各区或ハ各個人ニ於テ糞尿及塵芥ヲ処分シ町営トシテハ何等ノ施設ナシ」（世田ヶ谷町）[51]と記載されている。

おわりに

「世田谷」の下肥事情は東京市西郊に位置する地理特性に強く規定され、また東京市に出荷する蔬菜栽培の重要なファクターとなった。

東京市編『東京市農業調査書　第2分冊』（東京市、一九三八年）をひもとくと、一九三四年九月時点における東京市内の農家の汲取先世帯数は二一九、七一〇戸に及んでいる。汲取先世帯が多い区を順に並べると、足立区（五四、八一九戸）、江戸川区（五一、五四八戸）、葛飾区（四二、五一七戸）、板橋区（三六、七七三戸）と東京東部の区が並ぶが、その次に杉並区（一一、八一四戸）、世田谷区（一一、五五八戸）と続く。[52]

また汲取高になると、東京全体では二、六六八、三七四石が農家によって汲み取られている。内訳は、足立区（六七二、三二六石）、江戸川区（六一七、八一〇石）、葛飾区（五一七、七〇二石）、板橋区（四三七、九二二石）までの順位は同じだが、その後は順位が逆転し、世田谷区（一四二、一三〇石）、杉並区（一〇三、九七四石）となる。[53]

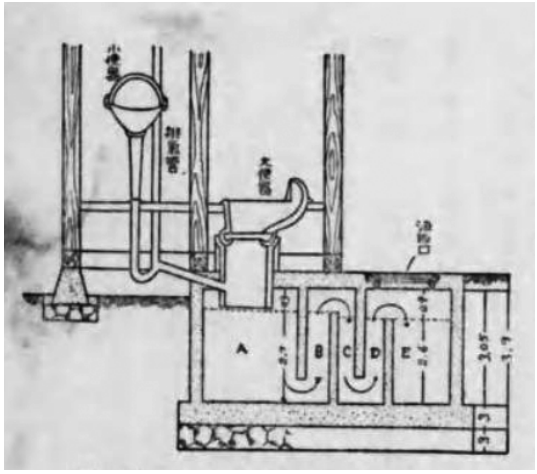
いずれも七位以下の区との数字の差は大きく、杉並区と並んで世田谷区は下肥汲取の「西の雄」であった。

しかし現在の世田谷区の人びとはそのことを誇りに思わないかも知れない。かつての都市民にとっても屎尿運搬の風景は忌避すべきものであった。経済的価値を持った下肥が、処理が必要な排泄物へと変化しつつある時代には、衛生問題も考慮しつつ「屎尿の汲り取りそれ自体が人道問題であるとも云へるし、之を溜めることによって、非常なる危険を伴ひ、且つそれが直に生活の脅威である」[54]との見方も生まれていた。

次に挙げるのは当時の若者たちに都市生活に関する希望を聴取した史料である。若者たちもまた屎尿が行き交う都市風景を毛嫌いした。

尿糞を運搬する荷車の、大通り殊に人目多き電車通りを悠々と引いて居るのは実に見悪くい。これらは道路を定め、其処を限って通る様にし、外より例の桶の見えぬ様にしたならば、人々の目にも左程止らず、不快を与へる事も少くなり、東京市を飾る一方法であると思ひます。（商業学校五年生）[55]

農民達が肥車を引いて悠々と市街を歩き廻ってゐるのは、支那風景や、田舎の自然美に取合せれば美景となるが、世界的の大都市にあゝ言ふものを配合するのは実に見苦しく、衛生上より言ってもよくない事である。即ち英京のロンドン等では汚物を一切何哩沖に排泄管で送り出すと言ふ話である。少し汚いが其れが最上策であらうから、是非実現したいと思ふ。（中学校四年生）[56]



図一　「中流住宅」における改良便所

備考：主婦之友社編輯局編『中流住宅の模範設計』（主婦之友社，1927 年）48 頁。

便所の水洗化はかつての近代東京を生きた都市民たちの悲願であった。一方で一九二〇年代から一九三〇年代にかけて盛んに取り組まれたのは、便所の水洗化よりもむしろ汲取を前提とした改良便所の普及であって、細菌や寄生虫卵を含む屎尿を汲取時までにいかに無毒化するかの研究が内務省を中心に進められた。[57]

主婦之友社が刊行した『中流住宅の模範設計』[58]においても、便所の水洗化は前提とされておらず、改良便所の導入を呼びかけていた。改良便所のアイデアは、屎尿排泄時点から汲取時点までおおむね三ヶ月間、屎尿をコンクリート式の便池に貯蔵することによって発酵を促し、汲取時に無毒化することにあった。図一では屎尿がA室からE室に移動するまでに三ヶ月かけることを目指し、三ヶ月後に汲取口から汲み取られることを想定していた。当時流行した「文化住宅」とて、基本は汲取便所であったのである。

冒頭で記したように、近代都市において覆いかくすべきものであった屎尿処理に光をあてる歴史研究が近年盛んになっている。リサイクルや物質循環の視点から近代のあり方を問い直す問題意識に基づくものであろう。本稿で示した「世田谷」の下肥事情に関する知識が「近代」への気づきの契機となれば幸甚である。

注

1 「数字でみる東京の下水道」(東京都下水道局HP、https://www.gesui.metro.tokyo.lg.jp/business/kanko/kankou/2014tokyo/05/index.html、最終閲覧日二〇二〇年七月七日)。

2 東京市保健局編『東京市保健局事業概要』(東京市保健局、一九三八年)一三六―一三七頁。

3 角和裕子「世田谷の村々と下掃除」(池享・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編『みる・よむ・あるく　東京の歴史⑥地帯編3　品川区・大田区・目黒区・世田谷区』吉川弘文館、二〇一九年)八六―八九頁。

4 「明治十年十月十七日糞尿汲取運搬に惣赤地の提灯使用方通達」(「旧太子堂名主森家文書」、世田谷区立郷土資料館編『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』世田谷区教育委員会、二〇一三年、一五一頁)。

5 「明治十年十月二十五日糞尿汲取運搬禁止時間改定につき布達」(「旧太子堂名主森家文書」、前掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』一五一頁)。

6 「明治十一年二月四日糞尿桶改造方布達」(「旧太子堂名主森家文書」、前掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』一五二頁)。

7 星野高徳「20世紀前半期東京における屎尿処理の有料化―屎尿処理業者の収益環境の変化を中心に」(『三田商学研究』五一―三、二〇〇八年)四九頁。

8 前掲『東京市保健局事業概要』一三七―一三八頁。

9 東京市保健局『公衆衛生ブックレット　第1輯　東京市屎尿処分調査概要』(大日本私立衛生会出版部、一九三〇年)四四頁。

10 同右。

11 前掲『東京市保健局事業概要』一三七―一三八頁。

12 屎尿処理に関する星野氏の論考は多数に上るが、東京市に関わる論考に限れば、前掲「20世紀前半期東京における屎尿処理の有料化―屎尿処理業者の収益環境の変化を中心に」、同「大正・昭和初期東京における屎尿処理の市営化」(『近代日本研究』二五、二〇〇八年)、同「戦前期東京市における屎尿流通網の再形成」(『歴史と経済』五六―二、二〇一四年)、同「戦前期東京市・大阪市・名古屋市の人口・財政・衛生環境」(『琉球大学経済研究』九九、二〇二〇年)などが挙げられる。

13 湯澤規子「「下肥」利用と「屎尿」処理　近代愛知県の都市化と物質循環の構

造転換」（『農業史研究』五一、二〇一七年）。

14 世田谷区政策経営部政策企画課区史編さん編『世田谷往古来今』（世田谷区政策経営部政策企画課区史編さん、二〇一七年）一六六頁。

15 荏原郡農会編『荏原郡農会史』（荏原郡農会、一九一三年）一一四頁。

16 東京府農会編『東京府の農業　附・林産及水産業』（東京府農会、一九一七年）五九―六〇頁。

17 小田内通敏『帝都と近郊　都市及村落の研究』（大倉研究所、一九一八年）一五六頁と一五七頁との間の表。

18 前掲『東京府の農業　附・林産及水産業』七〇―七二頁。

19 前掲『世田谷往古来今』一六六頁。

20 帝国農会編『東京市農業に関する調査　第3輯　東京市域内生産蔬菜配給状況』（帝国農会、一九三五年）四六―四七頁。ただし玉川村農事共同組合には玉川村と東調布町の事業者も加入している。

21 佐藤寛次『下肥・堆肥』（成美堂、一九一五年）二〇―二一頁。当時の佐藤は東京帝国大学農科大学助教授。

22 前掲『世田谷往古来今』一六六頁。

23 前掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』三五六―三六〇頁。

24 同右一一九―一二六頁。

25 熊澤徹「江戸の下肥値下げ運動と領々惣代」（『史学雑誌』九四―四、一九八五年）。

26 小林風「近世後期江戸周辺地域における下肥流通の変容―天保・弘化期の下掃除代引下げ願と議定を中心に」（『専修史学』三八、二〇〇五年）。

27 前掲「戦前期東京市における屎尿流通網の再形成」一六頁。

28 同右一六頁。

29 前掲『帝都と近郊　都市及村落の研究』一五五頁。

30 前掲『世田谷往古来今』一七〇頁。

31 前掲『帝都と近郊　都市及村落の研究』一五五頁。

32 東京市臨時国勢調査部編『東京市国勢調査附帯調査　昭和一〇年　区編　世田谷区』（一九三六―一九三七年）一頁。なお一九三五年一〇月一日時点の北多摩郡千歳村の人口は一〇、三四九人、同砧村の人口は九、八六六人である。

33 前掲『世田谷往古来今』一七五頁。

34 東京市臨時国勢調査部編『東京市国勢調査附帯調査　昭和一〇年　区編　世田谷区』（一九三六―一九三七年）二頁。

35 同右。

36 同右。

37 高嶋修一「東京西郊の土地整理」（前掲『みる・よむ・あるく　東京の歴史6　地帯編3　品川区・大田区・目黒区・世田谷区』）一〇五頁。

38 同右一〇六―一〇七頁。

39 同右。

40 前掲『帝都と近郊　都市及村落の研究』一六二―一六三頁。

41 前掲「20世紀前半期東京における屎尿処理の有料化―屎尿処理業者の収益環境の変化を中心に」三四―三六頁。

42 前掲「戦前期東京市における屎尿流通網の再形成」一八頁。

43 田中愼一「解説　日本首都西郊旧世田谷諸村一円地域の江戸東京との下掃除関係および下肥事情」（前掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』）の四一―四一三頁には、「世田谷」の軍と農民との下掃除契約関係に関する詳細な史料紹介がある。

44 「大正八年三月三十日　下肥馬糞寝藁払下契約書」（旧松原村相原家文書、前

掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』三六〇―三六四頁）。

45　「大正八年四月一日　野砲兵第十三聯隊下肥掃除下請負ニ付契約書」（旧松原村相原家文書、前掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』三六四―三六六頁）。

46　「大正十年四月一日　近衛師団軍隊・近衛歩兵第二聯隊・野砲兵第十三聯隊下肥掃除等に関する契約書」（旧松原村相原家文書、前掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』三六七―三六九頁）。

47　「大正十一年三月三十一日　下肥・馬糞等掃除請負契約書」（旧松原村相原家文書、前掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』三七〇―三七三頁）。

48　「下肥・馬糞其他処分担当区分調書」（旧松原村相原家文書、前掲『世田谷叢書第七集　下掃除関連史料』三八四―三八五頁）。

49　東京市臨時市域拡張部『市域拡張調査資料　荏原郡駒沢町現状調査』（一九三一年）二四頁。

50　東京市臨時市域拡張部『市域拡張調査資料　荏原郡玉川村現状調査』（一九三一年）二二頁。

51　東京市臨時市域拡張部『市域拡張調査資料　荏原郡世田ヶ谷町現状調査』（一九三一年）二二頁。

52　東京市編『東京市農業調査書　第2分冊』（東京市、一九三八年）一四三頁。

53　同右一四四頁。

54　中村舜二『大東京』（大東京刊行会、一九二九年）三六一頁。

55　東京市政調査会編『小市民は東京市に何を希望してゐるか』（東京市政調査会、一九二五年）二三二―二三三頁。

56　同右。

57　たとえば内務省衛生局編『消化器伝染病及寄生虫病撲滅実験報告』（内務省衛生局、一九三二年）など。

58　主婦之友社編輯局編『中流住宅の模範設計』（主婦之友社、一九二七年）。

○引用中の漢字表記は適宜新字体に改め、ルビ・圏点は省略した。

（まつだ　しのぶ　歴史文化学科准教授・近代文化研究所所員研究員）